

「あのつらさは経験した人でないと分からない」といわれる帯状疱疹の痛み。こじらせてしまうと、皮膚の症状は治まっても神経に障害が残り、いつまでも痛みだけが続く「帯状疱疹後神経痛」になることがある。痛みを緩和を担うペインクリニックでもある井上クリニック（神戸市灘区友田町3）の井上隆弥院長は「早期診断・治療で痛みをできるだけ早くに取り除くことが大切だ」と話す。



井上クリニック

（神戸市灘区）

井上隆弥院長に聞く

顔、手足の症状は特に注意

対処遅れると神経痛に

帯状疱疹後神経痛は、神経が傷つき、虫食いのような状態になってしまうことで、衣服が少し触れただけでも電気が走るような痛みを感じるようになるやつかいな病気だ。特に60歳以上や、心臓病、糖尿病などの持病があり、免疫機能が低下している人はなりやすいといわれている。

さらに、こうした人以外でも注意が必要な場合がある。急性期

の帯状疱疹の痛みは神経の炎症が原因で、痛みの強さは炎症の強さの現れでもある。「このとき、顔や手足に症状が現れる人は要注意」と井上院長。

「神経痛が残ると痛くて動かせないため、筋萎縮を起こすこともある」と話す井上隆弥院長（神戸市灘区友田町3）

顔や手は胸などより神経が過敏で、神経痛を残しやすい傾向にある。手足に出た場合には痛みだけでなく、運動機能にも障害を来すことがまれにあり、注意しなければならない。「神経の炎症は早期治療が大切で、対処が遅れると神経痛になってしまう」とする。

治療には、傷ついた神経に直接作用する「神経障害性疼痛治療薬」の処方や、痛みの悪循環を断つため、神経に麻酔薬を直接注射する神経ブロック療法がある。

だが、治療のタイミングは症状の現れ方によって異なる。「重症化の恐れがある人は、早い段階で見極める必要がある」と井上院長。重症化を防ぐため「抗ウイルス剤をできるだけ早く飲み、ウイルスの活動を抑え込むことが大切だ」と話す。

神経痛になると、脳が痛みに対して敏感になり、ほんの少しの刺激やストレスを感じるだけ

◇この面の記事は片岡達美が担当しました。